

11/10 TOCシンポジウム 基調講演

基調講演 1	日本版スループット会計 —MQ会計のすすめ—	監査法人アヴァンティア パートナー 公認会計士 相馬 裕晃 (当会監事)
<p>原価計算は「生産性の最大の敵」である。TOCでは、スループットの最大化を阻害する伝統的な原価計算に代わる指標としてスループット会計が開発されています。スループット会計は、コストワールドからスループットワールドへ、劇的なパラダイムシフトを起こす指標として非常に重要な概念です。</p> <p>一方で、スループット会計は、日本企業での実務への適用は、他のTOCのツールに比べると残念ながら限定的となっております。</p> <p>実はスループット会計と同じコンセプトの会計が、日本でも昔から活用されています。その名も「MQ会計」です。MQ会計は、80万部の大ベストセラー「人事屋が書いた経理の本」で「戦略会計STRAC」として約40年前に紹介されてから、現在に至るまで日本の優良企業で採用され、成果を出し続けています。</p> <p>今回の講演では、日本で生まれた「MQ会計」について、その概要と活用方法について事例を交えながら紹介いたします。</p>		
基調講演 2	「ソフトウェアの開発の 本当のボトルネックとは何か？」 WOW！とユーザーに言わせる価値に集中した TOC流ソフトウェア要件定義プロセス Eyes for Value – Value Driven software requirement definition process in TOC way	ゴールドラットコンサルティング ・ジャパン 代表 岸良 裕司 (当会専門家会員)
<p>ソフトウェア開発に関して、プロジェクトマネジメント以前の問題として仕様が決められないという長年未解決の問題があるの言うまでもありません。IT業界には「銀の弾丸はない」という定説まで作られるほどで、これが本当のボトルネックとも考えられます。</p> <p>CCPMやらなくても、Agileやらなくても、本当は要件定義さえしっかりしていれば、無駄な手直しをすることなくソフトウェア開発はうまくいくとも言えます。なぜならば、プロジェクト遅れの理由のほとんどは仕様変更で、しかも、それは本当はユーザーは何をしたいかが分からないという課題からきているからです。</p> <p>逆に言えば、「ユーザーさえ言葉に表せない本当の要望を明らかにする」ことが、本当の問題解決につながるとも言えます。</p> <p>TOCはそれぞれの業界において、長年未解決の問題にブレークスルーを引き起こしてきました。ご存知のように、ゴールドラット博士はもともとソフトウェア開発者です。今回は、ソフトウェア開発におけるTOC流の要件定義の知識体系についてお話をしていきます。</p> <p>ユーザーのWOW！が見える要件定義ができれば、ソフトウェア技術者はコードを書きたくてたまらなくなる。そんなプロセスをご紹介します。</p>		